

TruPhase の活用(9) —音源の位相確認(9)—

1. はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(8)に引き続き CD の位相確認を行います。

2. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(8)と同様、前報(1)と同じ経路で CD の位相確認を行いつつ、バッハの CD を聴いていきます。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、[音源の位相チェック実験\(25\)](#)と[音源の位相チェック実験\(24\)](#)で使用したバッハのヴァイオリンの作品で下記のとおりです。

PHILIPS PHCP-11057

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲 1 番・2 番・3 番
今井信子

ACCENT ACC24196

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲 1 番・2 番・3 番
Gigiswald Kuijken

PHILIPS PHCP-9089～90

J.S.Bach 無伴奏チェロ組曲全曲
モーリス・ジャンドロン

3. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうか焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相反転させた状態で TruPhase のボリュームを固定し、TruPhase での位相反転では、Brooklyn DAC+でのボリュームでの調整だけにしました。

そして、Brooklyn DAC+では位相反転させないで、TruPhase での位相反転有り無しで聴いていきます。

今井信子盤は、ヴィオラでの演奏で、位相反転させますと、音像が過大になり定位が曖昧になります。位相反転させないと音の焦点があって、ヴィオラの音色が本来

のチェロの演奏とは違った趣で聴けます。

Gigiswald Kuijken 盤は、肩からかける小型のチェロのような **Violoncello da Spalla** での演奏で、位相反転させますと、定位が曖昧で音像が大きくなりすぎます。位相反転させないと、この曲の演奏は実際に演奏会で聴いていますので、このような乾いた音色でこのような演奏であったかという記憶が蘇ってきます。ジャンドロン盤は、位相反転させますと定位が曖昧で音像が大きくなりすぎます。位相反転させいと、ジャンドロンのチェロのふくよかな胴鳴りを聴くことができ、同じ演奏のアナログ盤に迫る音質になっています。

4. まとめ

TruPhase での位相反転と **Brooklyn DAC+**での位相反転の結果は、音源の位相チェック実験(25)と音源の位相チェック実験(24)同様の傾向になることが分りました。

以上